

れ、他方、竹や木、絹、紙など、今ここを越えて持続する質を持たない脆く柔らかい媒体、したがって、より便宜性が高く入手可能性や利用可能性¹²⁹も高い傾向のある媒体は主に、此岸に属する同時代人に向けられたコミュニケーション・ジャンル¹³⁰、たとえば行政文書、行政・政治的な記録・史書、文芸作品、個人的な交信などの日常的な用途を持つ書記に広く用いられていたことを指摘している Tsien (2004 [1962]: 199-200) を参照されたい¹³¹。また、同様に古代中国の書記をめぐる言説に関して Lewis (1999: 8) が次のように述べていることにも注意したい。すなわち、易の注釈として記され、書記・文字の起源を自然界の規則性に結びつけているもろもろの説は、天界・天文の現象に用いられるのと同じ語、つまり「象」という語を用いて書記・文字について論じており、そこでは天の観察と文を読むことが世界を解読する2つの様態として等価に捉えられているのである。さらに、この同じ「象」という語は、また、文字（漢字）についての最初の体系的な分類の枠組みにおいて中心的な役割を担っており、そこでは、①易の八卦（トリグラム／3つの記号列）、②天文現象、③文字、これら三者が、1つの共通の意味体系の3つの変異形として解されているという¹³²。）

第4節第4項 スラヴ語圏における聖なる（書物の）文字としてのキリル文字とその地政史

一方、スラヴの場合は、神自身が啓示をとおしてキリルにスラヴ文字を示したとされている¹³³。しかし、もちろん、文字や言語の神聖さは、上でも示したように極めて政治的な問題であり、それは、単に「宇宙論」や「イデオロギー」に関わる次元においてだけでなく、露骨に現世的な「政治」、地政学的な戦略・操作の次元も含み込んでいる。以下、本項では、そのことを具体的に示すため、「キリル文字」の地政史について詳述する。

まず、歴史的に言えば、神によってキリルに啓示された（言い換えれば、キリルが発明した）のはグラゴル¹³⁴ (Glagolitic) 文字で、いわゆるキリル文字はグラゴル文字を43個のアルファベットへと単純化した文字体系である。キリル（キュリロス）は869年にローマで逝去し、キリルの兄弟で協力者であったメ

トディオス（(Methodius) メフォディ）と彼らの弟子たちは大モラヴィア王国から追放されブルガリア第一帝国へと逃げ込んだが、メトディオスは数年後に死没、弟子たちが残されたブルガリア第一帝国において、おそらくオフリドのクレメント（St. Clement of Ohrid, 840年頃～916年）などが、これらの弟子たちと共にキリル文字を生み出したのではないかと推察されている。（なお、Qvale（2014 [1998]: 10）は、キリルとメトディオスは、ウルフィラ（ウルフィラス（Wulfila, 311年頃～383年））のゴート語訳聖書とそれに伴うゴート文字の発案を知っていたと記しており¹³⁵、後者がグラゴル文字の発明を刺激したことを示唆している¹³⁶。）

カトリックのスラヴ人は、その後も長らくグラゴル文字を使用し続けたが、正教会のスラヴ人はキリル文字を用いるようになり、古キリル文字はその後、ロシア語、ベラルーシ語、マケドニア語、ウクライナ語、ブルガリア語、セルビア語のアルファベット正書法へと分岐、グラゴル文字は、ダルマチアのカトリック教区のいくつかで、今日でも（あるいは、つい最近まで）使われている／いたといわれている。

このキリル文字についての詳細を、Kamusella（2008: 68-70, 87）に依拠して記述しよう。まず、中央欧州がまだフランク王国の支配下、あるいは確固とした影響下に入る前の時期、この地域はフランク王国・ローマ／西方教会とビザンツ帝国・ギリシア／東方教会との間にある中間地帯の様相を呈していた。そのような時代、9世紀半ば、フランク王国とブルガリアは大モラヴィア王国——すなわち、アヴァール可汗国の崩壊後、2世紀を経て中央欧州に勃興した、スラヴ語が用いられていた王国——そのさらなる拡張を防ごうとしていた。そうした地政学的状況下、大モラヴィア王国の指導者たちはビザンツ帝国と同盟関係に入ることを望み、その結果、この地の東方キリスト教への改宗のため宣教団がビザンツ帝国から派遣され布教活動が863年から867年にかけて成功裡に行われる。この伝道団の指導者となる2人の聖職者、すなわち、テッサロニキ（サロニカ）出身の兄弟、キリル（キュリロス；元の名はコンスタンティノス）とメトディオスは、モラヴィアでの布教に向けて、新しい文字であったグラゴル文字を使って彼らの故郷（サロニカ）のスラヴ方言を書くことを開始し、兄弟とその弟子たちは、聖書やその他のキリスト教文献をこのスラヴ語と

その書記法に翻訳していった¹³⁷。モラヴィアでの布教に際し、兄弟は、大モラヴィアがカトリックのフランク王国の影響圏内にあったため、ローマ教皇からの公式の認可を求め、一端、教皇の認可は下った。しかし、その後、キリルが869年に、続いてメトディオスも885年に逝去、その弟子たちもモラヴィアから追放されていたため、ビザンツ・ギリシア式の儀礼はラテン・ローマ式の儀礼によって取って代われ、スラヴ語はラテン語によって代替された。(その後、モラヴィア王国はマジャル人(マジャール人)の侵入などによって902年頃には崩壊、10世紀中盤からはマジャル人のカトリックへの改宗が進み、10世紀末にはカトリックのハンガリー王国が成立する。)

兄弟が、ギリシア語・ギリシア文字やラテン語・カロリング体ではなく、スラヴ語、そして新たな文字であるグラゴル文字を選んだ理由は、フランク王国とビザンツ帝国に挟まれたこの地域の間帯的性格に大きく関わっているようである。7～8世紀よりローマとビザンツの両教会は政治的緊張関係にあり、兄弟は、強く政治化されたギリシア語やラテン語のどちらかを採用するのを避けた。そして、両者の中間といえるもの、つまりカロリング体とギリシア文字草書体との混淆である新たな文字体系を作り出した。それによって、スラヴの俗語を表記することにより、後者を新たな書記言語へと転換したのだと推察される。

すなわち、グラゴル文字は、カロリング・ミナスキュール(カロリング小文字体；カロリング体；カロリング朝のカール大帝がアルクインに作らせたものの¹³⁸)とギリシア文字草書体との融合であると見なされている¹³⁹。

他方、キリル文字は、グラゴル文字よりもギリシアのアルファベットへの近似性が高い。上でも見たように、この文字は、おそらく、キリルとメトディオス兄弟の弟子たちがモラヴィアから追放された後に移住した第一ブルガリア帝国(681～1018年)で作られ出したものである。当時、ブルガリア帝国のハーンであったのは、ボリス1世(907年没；在位、852～89年)で、ブルガリア帝国は彼の治世下、864年にキリスト教に改宗し、893年には、ブルガリア議会(サボル(sabor))が教会スラヴ語をブルガリア帝国の聖俗両領域における公用語であると宣言することになる。また、ブルガリアの、ビザンツ帝国(コンスタンティノポリス総主教)からの独立を強調するため、ボリス1世の子であ